もう一つの現実世界。

零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう一つの現実世界。

【Ｎコード】
Ｎ３１３６ＢＡ

【作者名】
零夜

【あらすじ】
一人の不良と大勢のやくざが戦っていた。
いや、正直には殴り合い。
この少年は、最近事件を起こしまくっている。不良、それもそのはず。
万引き一日に三回、かつ上げ６　殴り合い七回。とても戦闘力の高い男だ。そんな男が　もう一つの現実世界へ。ひょんな事から飛ばされる。

始まり。（前書き）

この物語は、注意「とある魔術の禁書目録を元にして作られた作品です」

始まり。

「よぉ～お前、若い奴らが世話になったなぁ～あ？」
「ちっ・・あぁ？なんだよ。まだなんかようか？このシタッパが。
ボス連れて来いよ？
てめぇら、どうせ。弱いんだろう？」
「いい度胸だな？おい？」
この辺で喧嘩ばかりをしている。
最近噂の不良？と言えるのだろうか。
だがそれに似た。一人の高校生がいた。
「なめてんじゃえぇぞ？コラ？」
「うるせーな・・さっさと来いよ！！！
一瞬で、屍にしてやる
オラァ！！！」
その少年の喧嘩が続く間一つ話をしよう。
おやおや、もう時間のようだ。
次回。

始まり。（後書き）

どうでしたか？これを読んだ皆様の感想、アドバイス。
例えば「ここはもう少しこうした方が良いんじゃないの？」
とか「ちょっとここ、字間違ってるよ。本当の字は、〇〇だよ？」
または、「ストーリの展開速すぎない？」などなど。アドバイスいただければ幸いです。

もう一つの世界。（前書き）

一人の不良と、一人のやくざ。が殴り合いの喧嘩をしていた。
最近この辺では、強いと言われている。少年ＶＳやくざ。
つよいから、勝つに決まっている。
本来なら「やっぱ弱いな。つまんねぇ。しけてやがる。じゃあな。シタッパ」
のはずだが。「はぁ？俺が負けた？どう言う事だよ！！」

もう一つの世界。

「おいおいもう動けねぇのか？」
と、やくざは、言う。
「てめぇ・・舐めんなよ？」
そもそもこうなってしまったのはもう過去のこと、
と言うのは。昨日のことだ。
少年は、公園に呼び出された。
「おいおい。おれをこんなとこに呼び出す。ってこたぁ。ただごとじゃねぇよな？」
少年は笑みを浮かべながら言う。
「そうだよ。てめぇさ。態度気にくわねぇんだよ。おい。一遍入院しやがれ・・それがてめぇの魂。
預けてみるか？」
「魂とるのはどっちだろうな？」
なんとやくざのシタッパと思しき人物を二人とものしちまいやがった。
「おまえさぁ？言ったよなぁ？魂とるってさぁ？さぁ～て。預けるのどっちだろう。
そっち二人かそれとも俺か。なぁ（笑）」
「ひぃぃぃ・・す、すいませんでした」
「おいおい？逃がすと思ってんのか？」
「そ、そんな！！」
「さっさと死にやがれぇぇぇ！！！」
「うっ・・あぁ・・」
「おいおいもう。死んじまったのか？駄目だよなぁ？魂預けてみるか？とかいった奴が。
簡単に相手に魂預けちゃ・・あぁ～つまんねぇ。しずめぇとな」
その死体が見つかったらしい。

しかも。見つけたのが仲間のやくざってなぁ。最高におもしれぇ。
勝てるはずなんだけどよ。
そのはずの俺の腹に蹴りが入ってる。
「あ～あ強いのは自分だけだと思っちゃったんだ？んじゃあ、もう終わりだな」
「んだと？
はぁ・・？」
俺の目の前には、銃が一丁向けられていた。
「ち・・」
どうせ足掻いてもむだだ。死を受け入れようとした。
その時、
「そこの二人、今すぐ喧嘩をやめなさい・・繰り返す。すぐに喧嘩をやめなさい。
銃を捨てなさい」
「ち・・マッポかよ。まぁいい。どっちにしろてめぇは殺される」
目の前に、盾を持った察が。やくざを囲む。
俺は思った。この隙に・・下に飛び降りこいつも落とす
「ちくしょう囲まれたか！！」
「こっちも見ろよ！！」
「何？」
「オラァ！！」
蹴りが飛ぶ。そして、あいつが落ちる。俺もだ。
落ちる途中、黒い空間のようなものが見えた
もしも～し？
女の声がする
これが死に際のエンジェルか。
もしもし？
やけにうるせぇな・・この甲高いメスの声、
気づけって言ってんでしょうが！！！
「はっ？ぐは！！

てめぇ死に際の天使が何してんだ？」
「天使？なにそれ？私はただの能力者よ？」
「能力者？あぁ～またこのパターンかよ。
夏だから暑すぎて狂っちまったんだな・・可愛そうに」
「はぁ？本当ですけど？」
「あにめみてぇな話があるかよばかばかしい。消えろ消えろ」
夏は、こう言う馬鹿が増える。だから夏は嫌いだ。
「おいおいそこの思い込み馬鹿・・さっさと消えな」
「何ですって・・」
その少女からは、なにやら黒いオーラが
「お前大丈夫か？なんか黒いぞ？日焼けか？」
「ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
瞬間俺は、氷のようなでも黒くて冷たい。そして痛い。
それが襲う。
「おいてめぇ！！いてぇぞ！！さっきから訳のわからねぇ事ばかり言いやがってこらぁ！！
喰らえ！！」
俺のパンチは、あっけなく防がれた。と言うより。
あたらなかった？バリアが周りに張られた少女を殴ってるような。
俺の反応はこうだ
「はぁ・・・？」
「だから言っただろう？能力者だってさ。死にたくなければ私に人間である記憶を預けなさい」
「はぁ？ううわぁぁぁ！！」
俺の脳に激しい振動が来る。
そして、目を開ける。
「えっ・・ちょ。ここどこ？」
「ここはもう一つの現実世界。1リアル具現化ワールド。（限りなく現実に近い世界）
「おい・・おれの頭の中はてなマーク5個くらいあるんだけど・・」

ここは、私達の世界　余計増えたわ・・
そしてここは死んだものの世界　また増えたわ・・
そして、私達は、魔術学生　　なんだよそれ・・しらねぇーし；
ここにはたくさんの能力者が　いやだから。
わかんねえよ！！！最初から説明しやがれ！！！
「鈍いわね？分からないなら、暮らしてみるといいわ。」
どうやらここにいる。魔法使いさんは。顔は可愛いスタイルもバツグン・・
だが説明するのが相当面倒なようだ・・
俺は頭に手を当て、ぽっけに手を突っ込み上を向き。ため息をつく・・

「はぁ～・・で？俺は何をすれバインダー？」
「そうね・・まず始めに」
「待て！！日が暮れる。まとめて話せ。」
「戦ってもらうわ。」
少女は、さわやかな顔で言う。
「戦う？この拳でか？」
「いや・・違うわ。能力よ」
「持ってねぇよ！！！」
「大丈夫持つことになる」
「はぁ？」
彼女の言ってることが良く分からない。
「ところであんた。名前は？どうする？」
「俺の名前は。1龍鉱痔　雷鳴「りゅうこうじ　らいめい」だが。
どするって、なんだ？」
「あなた。本名で名乗ったら死ぬわよ？」
「いや・・あの本名名乗ったら死ぬって。どう言う冗談だ？」
「あんたってさぁ・・いいわ、教えてあげる。
本名は名乗ったら、ここの世界の人は、あなたを殺しにくる。
人間が嫌いだからね」

「つまり俺達は・・もう」
俺は、そう。残念だけどもう人間ではないわ。
と言われるのが一番怖い。
俺は幼い頃から幽霊とか化物とかが大嫌い・・
理由は簡単だ。　こわいから。
「そう。残念だけどもうあなたは人間ではないわ」
「うっ・・」
「でも化物でもないわ」
「あぁ？」
「私達は　魔法使いよ」
なるほど・・魔法使いと言うなの。化物だな
理解理解。
インプットインプット
うん・・・・こえ・・
「で？名前はどうすんだ？」
「空想名を使ってもらうわ。」
「それは、自分で決めるのか？」
「性格には想像して作る。て感じかな？」
「いまいち訳わからない・・」
「さぁ、決めて。３０秒よ。」
「は、はぁ？！！」そ、そうだな・・なにがいい？
２０秒」う～ん・・・
「１９」・・
「これってさ・・制限時間あんのか？」
「ないわ」
「ふーん・・・そうなんだ。」
「うん」
「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁ！！！今ままで真剣に考えていた俺の
考えは、どうなった？
無駄だって事か？返せ～時間を返せ！！！」

あまりの早口で言ってる間に。思いついた
「あ・・そうだ」
「うん？」
「レイフェル・・レイン。」
「おぉ～なかなかセンスある名前。センスによって手に入れる能力が違うのよね
その名前だと・・特別な1弦ね（げん）
「弦？」
「弦はその人の活動、能力、全てを使うときにその元となるもの。
それが弦。
「ほぉ・・で？お前の弦は？」
「私のは・・黒の弦ね。」
「色があるのか？」
「そう。黒は、黒魔術。緑は風。青は水、水色は、氷。銀は、コイン　金は　太陽。
赤は、炎、そして、紫が闇よ。」
「なるほど説明ご苦労」
「私、だからびっくりしたの・・」
いきなりマジな顔になりやがった。
何を言うんだ？
「なにが？」
「あなたのは、色がないの。無色透明なのよ。
無色透明は、結構すごいらしい。
名前の響きが無色透明だからかしら・・無色透明で。クリアないろ。
光だけが見える」
「で？お前の名前は？」
「リブイン　レンク」
「センスねぇな・・」
「言わないで・・私の唯一の弱点なの・・」
「あはは；なるほど」

そうかいざと言うときは、コレを使えばいいんだな。うん
「で？今からどこへ？」
「自動移動都市　リアフェン。」
「都市ならここにあるじゃねぇか・・」
「学園都市よりひろいよ？」
「なるほど・・学校がここで。普段はそこか。」
「そうよ。学校が終わると、電車に乗り換え。そして、バスを乗り。
門を潜り。
道を開き進む」
「それって・・とてもめんどくさくないか？」
「そうね・・かなり面倒よ」
声を潜めて言う。まぁ・・分かっていたことだけど。
「で？いまからそのルートで。」
「うんっ☆」
ものすごく明るく言う　レイク。
俺はものすごく腹が立っていた。

いまから移動らしい。

もう一つの世界。（後書き）

突然飛ばされたのは、もう一つの現実世界。
不良の少年がついたのは。
魔術がある学園都市のとある公園のとあるベンチの上だった。
そして、訳の分からない。センスのない女に出会う

リアフェン（前書き）

いきなり変な世界に飛ばされた俺は、またいきなり。
案内されることとなった。
もういきなりは、勘弁して欲しいものだ・・

リアフェン

俺は、移動都市リアフェンへのきつい道のりをさせられていた。
「はぁ・・はぁ・・お、おい。もうついたのか？」
「お疲れ様。ここが。自動移動都市　リアフェン。」
「お前・・疲れてもいないのか？」
「うん。慣れてるから」
こんな事，なれるものなのだろうか。
さすが化物・・

「さてと行くよ？」
「いや、どこへ？」
「都市ギルド。」
「はぁ？都市ギルド？あのモンスターを狩るゲームにもギルドって出てきたが。
そんなもん。本当にあんのか？」
「うん。あるよ。ついてきて」

ついて行き。2時間位したころだろうか。そこにはギルドと呼ばれる。場所があった。
「こんなとこ来てなにするんだ？」
「能力者登録。」
「登録？あのパスワードとかの？」
「違うわ。ここの登録は、奴らを倒して。できるもの」
「奴？」
「そう。能力者の体を喰らう。ｌＰａｒａｓｉｔｅ（寄生虫）それと。サイコメトリスト達」
「寄生虫は、分かるが・・サイコメトリスト？」
「人の神経に何らかの異変を起こすことのできる。危険な存在。」

「そんな奴と戦えるのか？」
「やるしかないのよ。」
「なるほど・・」
そして、登録任務のパーティーが組まれる。
だがその中にものすごい勢いで向かってくる奴がいた。
「んだ？てめぇ？」
「質問だ・・あなたは敵か？」
「さぁな？敵と思ってんならてきなんじゃねぇか？」
「仕方がない。この男は、私達の敵と認識し。
今この場で。消す。緑の弦・・マインド開始・・」
「はぁ？なんだよそれ・・わけわかんねぇよ！！」
「わからなくていいあなたは死ぬのだ。」
「はぁ？」
やばい今度こそ死ぬ。絶対に死ぬ、。ありがとう親父、母、そしてやくざ。
俺の今までの罪ここで全て。
「やめなよ。リス」
「私はリスではない。リスリン　リバージャーだ。」
俺が真剣に死を受け入れようとしたそのときだ。
リスと呼ばれる。クリーム色の神の小柄で束縛服を着ている女はリスとよばれた事にご立腹中。
一方、そのリスをとめている。赤髪の男、背が高い。
ここで、大切なことを忘れていた。
真剣死を受け入れようとした。俺の立場は、？今までの過ちを振り返った俺の立場は、？
「はいはい。餌あげるから、ほら、お前の好きな団子」
「こっこれは！！！ひと夏限定の。スペシャル。三色団子じゃないか！！！」
「まだいっぱいあるぞ？ほーら」
「うぉぉぉぉ！！なんと箱買い！！！全てもらう。お題はいくらだ

？」
「無料だ。」
「わぁぁぁい。私は、今、すごく幸せだ！！！」
赤髪の男があっけにとられている俺に話しかけてきた。
「な？可愛い奴だろ？仲良くな？」
「ああ・・で。赤髪、お前名前は？」
「僕かい？僕の名前は、ファレジー　ファイガリル　ロンダ。ロンダって呼んでくれ。」
「俺は、レイフェル　レイン。　呼び方は、レインだ」
「で、私が。リブイン　レイクよろしく。」
「・・・・」
俺の中でのレイクは、青髪で，，背たか？微妙な。だが化物と言う印象だけはあった。
その化物がいま俺に。握手を求めてる・・
「いや・・うん」
「なに？恥ずかしがりやさん？じゃ～あ。」
いきなり抱きしめられる・・化物に。地獄だ。
だが出るところは、しっかり出ていて。
やわらかさは、どうだったかな・・
おっと、だめだ。俺には、にあわねぇ・・

そして俺は、あの子に話しかける。
「あぁ～召し上がり中悪いんだが・・お前、名前は？」
「んむっ？ごくっ！私か？私は、リスリン　リバージャだ。
団子が大好き，，特に三色、一本どうだ？」
「はぁ？」
「友情とさっきの詫びだ。」
「あ、もらっとく」
食べてみて、びっくりした。
そして、声に出てしまう。

「うぉ・・うまい！！」
「お前も。三色派か？」
「確かにそのとおりだ。俺、ガキの頃から、三色が好きだ。」
「おお同士だな。」
そんななか。
「はい次のパーティー」
俺達の番らしい。
「いくぞ・・リス」
「リスと呼ぶな・・」
「分かった。三色ハンター」
「三色ハンター・・・・」
俺はすぐにやばいと感じた。
それは、顔をリスが顰めたからだ。
「ああ。その・・」
「レイン・・お前」
と赤髪が言う。
さらに
「あんた・・どんまいね」
「おいレイン・・こっちへこい」
「は、はい。」
「レイン・・ありがとう！！！！」
「はっ？」
「えっ？」
「うっ？」
俺と、赤と黒が反応
「少しお礼をさせてくれ。いい名前だ。名前のセンスがいい奴は、嫌いではないぞ・・」
俺の頬に手が伸びる。小柄？よく見ると俺と同じぐらいの背だった。しかも・・綺麗、これを言っちゃなんだが。
俺のもっとも好きと言うタイプ。

その少女が今俺に・・囁かれる「目を瞑れ」
「あ、ああ。こ。こうか？」
「上出来だ」
あの音がした。よくキスシーンで使われるあの音だ。
あの口と口が触れたときのあの音、ＴＶだと音だけで、感触は伝わってこない。
実際に口を合わせてないからである。そんなシーンが今、訪れた
口が触れる・・
「あ・・あの」
「ありがとう。」
「あの二人，，熱いと思わない？」
「そうね？熱いわね？」
そんなシーンがうれしかったのもぶち壊れるくらいに。
あの二色に。噂されている。
「ヒュ～」
「ヒュ～今夜はお二人さんどこへ？」
「いいところ僕知ってるけど・・予約しよっか？」
「えっ・・いつからそんな展開に？コレって。恋愛ものだっけ？
タイトルと違うような・・・」
「二回目のコールだ。さっき呼んだパーティー至急！！」
「やば！！」
「おいおいまずいんじゃねぇか？」
「間に合わせなければ」
「喋ってるなら急げ！！」
と赤髪。
俺達は急いで走るのだった。

リアフェン（後書き）

ギルドに到着し。ファーストキスをもらうレイン
その瞬間から、二人は団子仲間になってしまわれた。
そして、登録任務、間に合わせるために走る、

寄生虫との戦い。（前書き）

登録任務として。寄生虫を倒すことを命じられた。
パーティーは、任務に向かうが。
そこで。サイコメトリストと会う。

寄生虫との戦い。

「これが任務のステージか・・」
俺は、あまりの偉大さに圧倒されている。
「そう。ここが登録任務１ステージ目。
サイエンス　シチュエーション」
「さいえんすしちゅえーしょん？」
「ふんっ・・ 本当に何も知らないようだな」
赤髪が言う。
「あんた・・ それでも能力者なの？」
「しるわけねぇーだろ！！元は人間なんだから・・ 勘弁してくれよ・・」
「サイエンスシチュエーションとは、」
静かな空気の中、三色ハンターが語り始める。
「サイエンスシチュエーションとは、私達が任務を受けるときに使われる。ステージ。
寄生虫のみが存在している。サイエンスシチュエーションは。００１、００２、００３と
ステージが無限に広がっている。
「その後につく。１、とか３とかは、一体なんなんだ？」
「後につく数字は。それぞれ、能力者のレベルで決められている」
「つまり・・００３には、レベル３の能力者が居るって事か？」
「そのとおりだ。」
「そうそう。だから私達は、レベル１なのよね。」
（感心するように首を上下する）その言葉を聴けば誰もがテンションがダウンする。
「・・・ お前。」
「君ってさ，空気よめないよね」
「え？え？どう言う事？お姉さんにはわからないなぁ～」

「だから・・レベルが1の俺らのことで・・感心するなっつてんだろうが・・
悲しくなる」
「あ～あはは」
レイクは、苦笑する。
そんな時、アナウンスが入る。
「これより。サイエンスシチュエーション００１を始める。起動言語を忘れるな！！」
「はい」
「分かってるよ」
「了解した」
「了解・・起動言語？」
「力を解放するときに使う言語だ。」
「ああ、なるほど」
「では、スタート！！」
「レッド・・マインド開始」
「黒魔術・・私に力をかしなさい。マインドＯＮ」
「風よ。私と一体に・・」
「ほらあんたも起動言語決めなさい」
了解・・
「クリアーネイル・・レストレーション。」
「すごいな，，」「それっぽい」「おお！！聞いたことないよ」
三人は、口々に言う
「くるようだよ？」
「来るがいい・・」
「来なさい！！」
俺の前に一体飛んでくる。
その寄生虫は、長い管のような物を武器にして
俺の上に振り下ろしてくる。
「うわぁ！！」

目の前に、両手を翳すとその管が敗れる。
「おれ・・こんな力持ってんだな・・」
「危ない！！」
「まったく世話が焼けるよ君は、！！炎よ。形を槍にし。あの虫を焼き尽くせ！！」
炎のやり？のようなものが。寄生虫を貫く。
「儀ウィギャァァァァグギャサゲリラァァァァァ」
狂った声を上げ。一体崩れる。
「ちっ・・武器があれば。クリアレインシュソード。とかかっこいい名前付けるのに・・て・・これ。剣？
まぁいい。頼もしい武器に使い次第でなる」
前に三体、そして、後ろの5．俺は囲まれたが。
「手に握るものを。槍、釘。またはレーザとして。この手に現れよ。よし、これで！！はぁっ・・！！」
俺が手をかざす。手を向けた方向に。レーザーが飛ぶ。
白いレーザー
「これでも喰らいやがれ！！！
一列に並んでる。気持ち悪い奴ら。」
レーザーの発射音が鳴り響く。
「さいっこうだぜ！！！おもしれぇ・・俺が求めてたのはこう言う喧嘩だぁ！！！オーラ
オラオラオラオラ
オラオラオオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラ！！！ゴラァ！！！」
俺は、レーザーを大量発射した。
周りを12体ほどの寄生虫が絡んだ。が俺は、
両手を上に上げ。
力強く振り下ろす。
すると。上から、レーザーの雨が降りそそぐ。

「はぁ・・はぁ・・はぁ・・」
「おいおい調子に乗って発射しすぎだぞ？弦は。その術者本人の体力と引き換えに起動される。
能力だよ？気をつけてくれよ？」
「ああ・・」
「風よ・・この者に安らぎの風を」
「あぁ？これなんだ？」
「回復魔法だ。力、無駄遣いには注意しろ・・」
「真面目に聞いときなさいよ？」
「ああ・・」
寄生虫も全て片付けた。
そして帰ろうとしたときだった・・

寄生虫との戦い。（後書き）

能力者登録任務、それは。大量に寄生虫を片付けることだった。
だが。帰ろうとしたときである。

どうでしたか？感想、アドバイスなどなど。お待ちしております。

買い物。（ショート版）（前書き）

あの任務は終わり。
変な能力を持つ男も倒し。
俺達は、町に出かける用意をしていた。

買い物。（ショート版）

「でかけるって、一体どこいくんだ？」
「黙ってついてくるものだよ？こう言うのってさ」
「ほぉなるほど。そんなもんか？
そうだよ。」
「さてとここからは、自由行動よ？
せっかくだから、私と、ロンダ」
「レインとリスリンでいきなさい」
「はぁ？」
「あ・・ああ、分かった。（あぁ・・緊張する。この思いにあいつは気づいているのか？））」
「じゃあ自由行動開始！！
「さてとどこから行くんだ？」
「どこでもいい・・レインの好きなところだ。わわわ。私は緊張している」
「緊張？なんでだ？」
「だ・・だからその・・・」
「あぁ？」
「気づくまで待つことにする」
「ああそう。じゃあ最初は、服やでも行ってみっか？」

買い物。（ショート版）（後書き）

今回は、みぢかくしました。
どうでしたか？
感想や、アドバイス、
話の展開についてなど。
色々、待っています

自由行動　続（前書き）

なんかしらねぇけどよ。いきなり買い物だってよ。
はぁ・・面倒だなおい。まぁ組まされるペアが、黒じゃなくて良かった。
そもそもペアくむ必要があんのか？
まぁ・そんなこんなで俺は今、買い物に付き合ってる。

自由行動　続

「服やに来たのはいいけどよ。何買うんだ？」
「新しい。防具となるものだ。ルインもその服では・・」
「別に俺はいいけど？」
「私が嫌だ・・そんなぼろな服を着ている人と歩きたくはない」
「あぁ？わぁったよ。。」
つうかよ・・歩きたくねぇんならなんで俺と組んでんだ？
とか思いながら。俺は服を見る。
確かに人間世界とは違う何かがあった。
「この服が似合うんじゃないか？」
「わりぃ・・俺、こっち」「服のセンスがいいみたいだな・・」
そして俺達は服を買い。俺は、シルバーアクセサリーを一つ買った。
首にかけるタイプだな・・最高だぜ・・

「いいのかい？あの二人をほおっておいて」
「はぁ・・あんたさぁ・・分かる？」
「何がだい？」
「リスは、レインが好きなのよ」
「なるほど・・」
な～んか満足げに。首を「うん　うん」と上下する。赤髪だけど・・
女の子の気持ちくらい。理解しなさいよ・・
私は、そう思った。
「それより。ねぇ・・あんた」
「なんだい？」
「あそこの店行ってみない？」
「見るからに静かな場所だね。僕には似合わないよ」
「いいじゃん。行こう？」
「わかったよ・・」

僕はどうも・・戦い以外は苦手なところがある。
なぜかは、分からないけどね・・
とりあえずこの地獄の時間がさっさと終れよ。
僕は、後悔している。

「レイン・・」
「あぁ？」
「あそこ行かないか？」
「あぁぁ～？はっ？遊園地？」
「私は，，子供のころから遊園地がすきでな・・」
「でっ？最初のアトラクションのる？」
「あのお化け屋敷」
「いいのか？」
「なぜだ？」
「だってよ・・その束縛服だか魔法少女コスだがなんだか訳のわからねぇ格好で。お化け屋敷なんざ・・
リス、逆にてめぇがお化けに見えるんじゃねぇ？」
「うっ・・ならば何をきろと？」
「これにしろよ。」
と言うと。レイクは、私に似合いそう？なのかわからない服を出したのです。
なんでも、私がほかの物を見ている隙に店員に「あいつに気づかれねぇように。レジ頼んだぞ？」
と事ずけて。購入したらしいです。
よくやりますね・・
「ここがお化け屋敷か・・・」
俺達は入り口に入った。
そして・・一つ目の階・・
「言っておくが，，私は、お化けなど・・」
「じゃあ、なんで入ったんだよ・・しかもしっかり。服の裾にしが

みついてるじゃねぇか・・」
「・・・！！これは、その・・
その瞬間横からお化け役が飛び出てくる。
ううわぁぁぁぁぁぁ！！！」
「いてぇいてぇ！！いてぇっつうの・・」
「う・・う・・」
「はぁ・・なんだこいつ泣いてやがる。
思いっきりお子様じゃねぇかよ」
上からコンニャク・・ピタ・・
「う・・きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「もうすぐ出口だ・・ちったぁ静かにしろ・・」
「む・・無理だ！！」
「あっそ・・」
そして・・キャーキャーうるせぇ・・リスを慰めながら。
出口にでた。つうかよ・・つまんねぇ。最高につまんねぇ・
「さて。次はあれだ。」
「うっ・・」
俺はジェットコースターが嫌いだ。
しかも、スピードのある。ハイスピードコースターと言う奴がある。
そいつは、息ができねぇ位に、ビュンビュンと・・しかも。乗るのはカプセルの中で。
スピードをあげる。コーヒーカップで言う。あぁ～・・・あれだ・ハンドルみてぇのがついてる。
こいつのこのきらきらした目からして。スピードをハイスピード以上に上げるのは、見て取れる。
だから俺は、唯一安全で、俺でも知ってるデートスポット。そして、綺麗な景色を見渡せる
それ・・
「おい。あれの方がいんじゃねぇか？」
「あれは・。大観覧車？どうするのだ？」

「あれに乗って。上からのパレード鑑賞といこうぜ？
ここまでずっと激しい物続きだぜ？
少しゆっくりしようぜ。」
「それもありか・・ああ、分かった。乗ろう」
大観覧車に乗っていた。

「こんなに・・上から景色が見渡せるのがヘリ以外にあったのか。」
「お前・・ヘリしかしらねぇのか？」
「生まれてから。ヘリしか乗っていない」
ここでだ。このリスは、相当でかい家の娘かなんかだろうな・・
なんでも。普通の俺らが乗ったら。喜ぶ、ヘリを。
リスは、見飽きたとか言ってやがる。
もう確定だろ？
「おい・・始まったみてぇだぞ？」
「あれがパレードか・・」
風を纏うその少女は、目に涙を浮かべ。
その涙は、風の如くどこかへ消えていった。
「どうしたんだ？」
「すまない・・懐かしくて。あれは、何年前だろう・・
私がまだ。小さな頃、」
時は１０年前にさかのぼる・・
「私は、いじめが原因でないていた。」
「う・・う・・痛いよぉ～」
「そんなときだ。親が迎えに来てくれた」
「リスリン？どうしたの？　うん？」
「いじめられた・・」
「まぁ！！そんなことが」
「私・・どうすれば」
「ねぇリスリン」
「んっ？」

「お母さんと一緒に、遊園地行こう？」
「私は、優しく差し伸べられたその手をつかんで。
遊園地に向かった。
そして、乗ったのがこの大観覧車。そして・・落ち込んでいた私がなくしたものを手に入れた」
「なくしたもの？」
「笑顔だ。」「ほぉ・・」
「それから何ヶ月と時がたってな・・私の親は、寄生虫に殺された。
だから、私には過去があるんだ。
その過去を忘れられなくて。あのときの母の優しい顔が、思い出から削除したはずなのに。
よみがえってな・・少し涙が出た」
俺は、悲しいと思った。
人の過去に鑑賞するつもりは、ねぇ・・
ただ、コレだけはいえんだ。
「俺には、なんの過去もねぇけど。
その過去、ひきずんじゃねえぞ？
過去にとらわれた。てめぇなんざ。見たくねぇから。」
「分かっている。引きづるつもりはない」
「ただ・・それと同時にいえるのは、」
「？」
リスは、何かを聞くような表情でこちらを向く。
だから俺は、答えるような表情でリスに回答をする
問題じゃねぇ・・白紙の答えだけどな
「過去を振り返るのは悪くねぇんじゃねぇか？
振り返ると。引きづるじゃあ、意味がちがって来る」
「ああ・・その言葉。しっかり覚えておく。」
そして・・星が輝く。夜の海に。夜景と言う砂浜から、
花火が上がった。
と同時に。リスの体と触れる。

なんかしらねぇが。そん時だけは不思議と、恥ずかしさみてぇなのを感じだ。
「ありがとう・・レイン。しばらく近くに居させてくれ」
「かまわねぇ・・」
大観覧車は、回り続ける。風の少女の過去を回すように。
その頃・・

「ふぅ〜おわったわねぇ〜
あんた格ゲー弱っ！！」
「うるさいね！！屈辱だよ。
ゲーマーの僕としては、」
「んじゃあ、約束どおり。アイスお願いね？」
「ちっ・・しかしコレだけは言っておくよ」
「なによ〜？」
「次におごるのはお前だ。」
「楽しみにしてるわぁ〜
ってことでよろしくねぇ〜☆」
「仕方ないね・・約束は約束だよ。
守るさ。腹が痛くなるまで食わせてやる・・」
「いま・・悪意のようなものを感じだ；」
「気のせいだよ・・ククク・・」
「やっぱ悪意だ」

「ちっ・・まだ私を追いかけると言うのかお主は！！！」
「だってよぉ〜。まだ殺してねぇよ？」
「くそ・・氷の刃よ・・あの罪人を突き刺し。もてあそべ！！」
「言語となえんの？めんどくせな？
いこうぜ？闇ども。俺に力を貸しやがれ」
「ち・・このカードで！！コインよ！！太陽の力をかり。その力を剣とし。その力をカードに収め

我に力をかせ！！」
「おっと．．吸収吸収！！」
「くそっ．．」
「一回ごとに呪印唱えてるようじゃ俺にはかてねぇーぜ？あぁでも唱えないとつかえねぇのかぁ～
かわいそうになぁ！！！」
「地面が！！黒に？ぐわっ．．」
「大丈夫か？氷よ。その力をムチとし。罪人をしばりあげろ！！」
「おっと．．攻撃無効！！」
「なに？あぁぁ！！」
「逆に縛られてやんの？だっせぇ～」
「後ろをみろ！！」
「こっちのせりふだぜ？」
「なにっ？がっ．．」

「この感じ．．分かるかい？」
「もちろんよ．．」

「あぁ？この感じ、ちっくしょう。休みなしかよ！！」
「敵は、あの町の裏通りのようだな」
「ああ、いくぜぇ！！夜景を邪魔した奴を血噴水に仕上げてやろうぜ！！！」

自由行動　続（後書き）

自由行動を楽しむ、能力者達。
そんな自由時間を。割くものが現れる。

一方アイスをほおばろうとしていた。瞬間だが。
嫌な気配を感じてしまう黒魔術師と炎使い。
そこに現れる。暗黒の存在。紫のものとは？

闇。（前書き）

つうかよ．．夜景見てるのに邪魔するのは、どこのどいつだ？
空気読めねぇよなぁ～。
だが先にはあいつがいた。

闇。

「くそ・・このままでは。私達は。」
「ちっ・・」

「はぁ・・君達も能力者なら。このぐらいの奴は片付けておいて欲しいよ。」
「誰だ！！」
「なるほどね・・変な感じがしたのはあんただったのね？」
「質問する。　あなたか？風に不穏な物を持ち込んだのは」「へぇ？まだいたんだ？こんなザコ達が！！」「僕達を舐めると。怖いよ？いいか？舐めんなよ？炎よ」
「起動コピー完了・・あそうだ。言い忘れたけどさ？？
俺のちからってよぉ。お前らのじゅもんみてぇなものを。コピーして。
その力。俺の物になるんだぜ？　いくぜ。闇はその力を欲する。」
「なんだって？まさか君は，，」
「何でもいいわよ！！黒魔術たち」
「コピー完了、闇は、その力を欲する。」
「黒いヤリよ！！いきなさい！！」
「黒い。ヤリよ。無数の数で。行け・・」
「えっ？うわぁ！！！」
「炎よ。何でもいい。奴を倒すことだけ考えろ・・」
「ぐっ・・」
「そういえばお前さぁ？よみがえれるらしいじゃん？
よみがえる力を吸収」
「がぁぁぁぁぁ！！！」
「風よ。突風となりて、あの闇を打ち砕け」
「呪印コピー。闇はその力を欲する

黒き風よ・・あの風を苦しめ。そして。縛り上げろ！！」
「んきゃぁぁぁぁあ！！」
「無駄だ・・あきらめろ」
「つうかよ。夜景を邪魔する嫌な感じが居ると思ってきてみりゃ。あんときのやくざじゃねぇか？あけてびっくり玉手箱だよなぁ？なんでてめぇがここにインだ？ご説明願おうか？
血噴水は、その後だ」
「よぉ？不良。あんときは感謝してるぜ？
なんせ落ちたらよぉ・・・なんか空から、黒いものが降ってくんだよ。
その黒いもんがさ・・「私達は1反能力魔術政府組織（はんのうりょくまじゅつせいふそしき）って言うんだよ？でな？「お前も一員となれ」
とか言われてよ？それからだな？この便利すぎて最高におもしれぇ力を手に入れたのはさぁ！！
ただな？無色には気をつけろだとよ。いるわけねぇよな？そんなやつ」
「なるほどな・・無色、ダブルブレイカーのことか？ヤクザくんよぉ！！」
「やめろ・・そいつは、レベルトップクラス。かなう訳がない」
「お主・・やめろ・・これ以上、僕の目の前で死ぬ人を見たくはない・・」
「僕？てめぇ・・女か？」
「そうだ。」「なら話は、早ぇえ　てめぇらじゃ無理だ下がってろ」
「なんだと？」「死にたくなければ言うことを聞けよ。」
「ごちゃごちゃうるせえぞ？」
「おっとこりゃわりぃな？行くぜぇぇ！！！　スピードモード！！」
「やめなさい。あんたじゃかなわないわ」
「無駄に死ぬな・・」
「やめてくれないか？」
「おらぁ！！！」

「欲する・・」
「はぁ？」
「闇よ神速だ。神速の黒を俺に。」
「ぐわぁ！！」
俺は後ろ瓦礫にぶち当たる。
そして下からは。黒い剣が刺さる
「がはぁ・・ク・・おもしれぇ。言語コピーか。」
「やっと気づいたのかよ？この馬鹿不良。」「て・んめぇ・・しかたねぇな？解禁すっか？殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺・・千代民深みルビアブリアはぐりはやぬぬぬぬ・・・
解禁・・」
「なんだ？気がくるったのか？」
「どうした？レイン」
「なんだ？あれは」
「お主・・」
「え？ななんなの？おねぇさん分からないな・・」
「あれは・・古の書にあった。あらゆる呪を呼び出すちから、ダブルブレイカーの力を遥かに超えると言う。
スサノオ・・陰陽の時代に現れたと言われる。神・・いや、鬼か？その姿は鬼か神か・・そのなも・・呪印コントロール。パトキシス・・本来なら、雨の群雲の剣と言う物を持ちえて起こす
証明されていない。魔術でも能力でもない。使うことを禁じられた。もうただの力だ。
全員離れろ！！みんな死んでしまうよ！！」
「さてっと・・殺すか。おい来いよ？」
「闇よ。がぐは！！」
「おせぇんだよ？あはははは！！！ほらほらほらほらほらほらぁ！！」
「何んだこれまるで・・神。全ての闇よ行け！！」
群呪十輪・・」

「なに？体のなかから何かが取り出されるような・・この感覚、ぐうわぁぁx！！」
「ほぉ・・コレがてめぇの全てを動かしてる。心臓か？さよならだなぁ！！！言い残すことは？」
「ア・・グ　アアワヤ・・ガイガ」
「おせぇんだよ！！！」
グシャ・・
確かに何かをつぶすような感触はあった。
それが奴の心臓だとは、な？
「はぁ・・はぁ・・はぁ。。」（なんだったんだ？あの力、勝手に力が沸いてきやがった。）
「うわぁぁがぁぁ！！！」
「だめだ！！暴走するぞ・・」
「・・・全て消し去る。我こそは神なり・・・」
「あれは・・神？」
「なんなんだ？」
「小さき者よ。私の邪魔をするな・・」
「おいレインしっかりしろ。炎よ！！ぬわ！！早い？」
「行くわよ黒魔術」
「腕で足りるな・・」
「あいつは。消さないといけ！！カード！！
荒れ狂う者を沈めよ」
「カードは、全て破れ。その力を。術者に戻せ」
「なに？うわああ！！」
「氷よ」
「氷は見る影もなし・・雷により消されよ」
「うわぁぁぁ！！！」
（みんなが死んでいく・・私と一緒に。服や夜景をみたれレインは？
お化け屋敷に行ったレインは・・私の団子仲間のレインは、？
やさしかったレインはどこに・・

やめてよ・・もうやめて。これ以上一人になりたくない・・
やめて・・やめてよ！！レイン！！！」
「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」
「ぐわっ！！！なんだこのやさしさは、私の力に反する。思いの強さ・・
その強さ。暖かさ。我は認めよう・・また欲するときまでは」
「あく・・」
「大丈夫か？レイン。」
「ああ・・もんだいねぇよ。なんでそんなに心配した顔してんだ？」
「良かった生きててくれたかい・・」
「ああ。良かったな。太陽も喜ぶ」
「いやまて・・お主。いまなんといった？」
「はぁ？なに心配してんだって。・・・て・・・言っただけ・・あ；
えーとっ」
俺を見つめる女の視線が恐ろしく・・俺は、
「あんたってさぁ・・本当わかんないのね？ここにいる女の子だって。全員そう思うわよ？
ねぇ？氷の能力さん。」
「まったくだ・・信じられん。
なぁ風よ・・」
「確かにな・・・」
「ああ。レイン　君？　逃げるかい？」
「逃げ道こっちだ！！早くしろ。女の怒りがレイン　お前を追うぞ！！」
「賛成！！！」
「さて・・みんな。追っかけるわよ？男を全員。捕らえろ！！」
男達「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁまじでぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
俺達はみげっぱなしで。リアフェンのホテルに戻る事となった。

闇。（後書き）

どうでしたか？
感想やアドバイスなどお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3136ba/

もう一つの現実世界。

2012年1月10日03時48分発行